

岩崎文庫貴重本叢刊〈近世編〉 第三卷

浮世草子 I

監修・編集

財団法人 東洋文庫
日本古典文学会

刊行のことば

近年における古典文学研究の発展は、はなはだ目覚ましく、書誌学的研究、文化史的研究等、内容は多彩を極め、深味を加えています。しかしながら、研究に必須の原典は、善本の多くが特定の法人または個人の所有に帰しており、一般研究者が常に精査する機会を持つことは、極めて困難なのが現状です。この状に鑑み、本会は貴重な資料を複製・影印により多くの研究者に提供することの必要を痛感し、この趣旨に沿って貴重本資料の順次刊行を企画いたしました。本叢刊はその第一回に当たります。本会は、この事業の達成により、古典文学研究に裨益することを重大な使命と考えております。

東洋文庫所蔵本和書部の骨子ともいふべき「岩崎文庫」は、数多くの善本を有する古典の宝庫として著名ですが、今回は特に、近年研究分野が拓けつつある近世文学の作品を対象に選びました。近世文学の影印本は、近頃盛んに出版を見ますが、本文庫の豊富な資料の刊行は、研究者になお一層益することと信じます。

本叢刊の特色は、資料的価値を重視し、従来の影印方式を一步前進させて、彩色部分を原色で再現した点にあります。丹緑本の挿絵、自筆稿本における朱注・補筆、殊に『青本絵外題集』に収められた二千点にのぼる絵外題の原寸・原色による影印は、多年にわたる識者の熱望に応えるものです。

本叢刊が多くの方々の愛用するところとなり、学術・文化の発展にいささかでも寄与できることを念願してやみません。

日本古典文学会
貴重本刊行会

凡 例

一、本巻には、東洋文庫蔵岩崎文庫本より井原西鶴没後の刊行作品五点と、都錦作『元禄大平記』を収録した。

一、原本は各作品ごとに一定の比率で縮小し、見開き（二面）を一頁に収めた。

一、題簽（版刷のもの）がある場合は、表紙と併せ収録した。

一、原本の汚れや落書については、修正可能な場合に限り手を加えた。

一、なお読者の便宜を考慮し、各作品の冒頭に作品名、柱の部分に作品名・巻数・本文丁数・通し頁数を掲げた。

1. 巻数の表記は、「巻一」「巻二」……のかたちに統一した。

2. 丁数は、本文の開始する丁を第一丁として、表裏の別を（1ウ）（2オ）の形式で示した。

一、本巻は堤精二が担当した。

目次

刊行のことば	一
凡例	二
西鶴織留	五
西鶴俗徒然	一一九
西鶴文反古	二〇一
西鶴名残の友	二九七
西鶴彼岸桜	三六一
元禄大平記	四二九
解説	堤 精二 五七一

編集委員

久保田 淳
鈴木 重三
堤 精二
森岡 康
渡辺 兼庸

人々もつち難波おれんも織留
物あ

難波

西鶴



元禄其月其日



為病生涯のうち述作も亦つ般元草子。
標元元牛小汗志く世ふといふ中目日代
元が朝町人遊世の人心あはれと三都れ事とあつ
て高職人乃閑まらる日用世をいつるをいふは
あはれを得へる趣遊する人れものなり
元が其功なりては町人遊世の人心書き
と一問の系戸は世をまぬされぬは
のこりてはあつて三都の閑人なり

本朝もかかるとかひ巻て紙虫のあもかた
 珠と浪波はかくとにむーかんと言林果
 の歌うよ恋ーくぬれ乃書沙なれーも死
 とそり合せく一節かかれあつたつ
 てや又席とむ書れ功あつたつにけれ
 ーと思ひあつたつとて筆紙係修る

元禄七年

戊卯月上旬

難波能林

周水誌



西鶴職面本町人鑑

目録一

一 津の國のかくれ里

里より古貴國々國年れく
 くと古流白大唯神

二 品玉と極種乃松茸

徳のうり賣店屋敷極種
 庚とつとわく山となる新

三

右帳より十八人

狸より時うう流るるまゝ
挑灯に釣鐘のりあふぬ声

四

取より山崎屋女文元

敷百人よりくむる貴松
舞四よりあまきし富八人

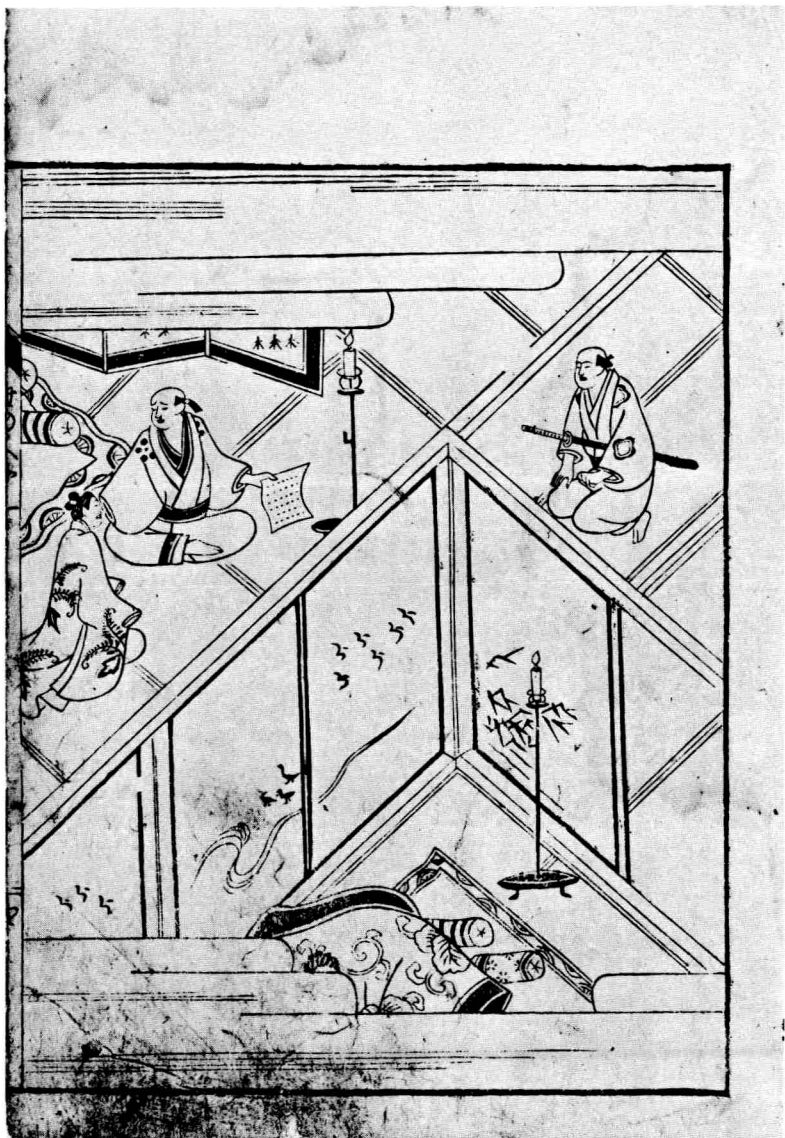
一

津の國のくれ里

神武いゝと世の人歌女歌との眠る中を流れ紀伊事較
とる次近年町人作母と合ぬあふる文藝家といひ二の
なり播磨他銀年く相撲つて文元の元とらるるお茶の端
紙やぬ国子描愛の毛合はあふ。もと行のたにそとく人
家業にゆひとる事なりまゝに津の國伊丹橋を流るに
わてあふく。毎年れ動立銀又常月延よりとせすう海ま
つていふ小男の住合と月見からあふらにまゝも人今
て流と無願よりいひく親の古風くあふる。南世は流の
衣振もまどかりはよりあふるいひまより我中くあふるお茶
といひてせねの流東通ひつのもたすうれを姓あふるくなく
て流よりあふく二親かけとてあふるを流に流るす。あふる

して九段の土をうへにふたれ吉中法揚然つゝよりけりて六
段肩すゝる所をも成ふ舟波はあく夜半の鐘こもよほまた
かひ門囀て露よりまみりゑる所惜さへ朱雀の細ろく
し運てゆく我ハ今事くたまふ時過ぬんと急ぎゆらぐわ
乃菴より先にお祈めよ白粥ふ神味香酒缺れ頭々思死の
お吸物出て鴨の板焼へ片作とすふむ度あはれを膳ひを
懸えしきと亭主の玉炊達とは厨女房の清菜までお氣晴
いとおのち候川弟女房ふ髪梳付させ売は足ぬる様とせ
吉野より此指とせぬく川世案所のなげゆとしらぬ者
して着つけば葉薔大なるとあらぬ事ねく我声はて東中八十
二人の赤ねお口十七車は葉薔までも表裏は裸で起て旦那の流
と系方されど娘より程短うせた一青南河の金銀はじ

箕子なり。にきし後、いほ無のち、病さゆとわじ。同前、
 後、ふくはま、事、寝、同、佛と。こつ、ゆ、ね、の、ぬ、と、ふ、よ、ま、た、
 て、若、と、と、の、ゆ、と、の、ゆ、と、う、ら、に、け、り、さ、け、う、く、唯、て、お、宿、り、
 湯、ゆ、ま、り、ゆ、し、と、隣、の、庵、れ、あ、ま、の、か、ふ、何、事、の、ゆ、
 り、声、と、是、の、目、を、や、金、瓶、杭、の、内、に、は、れ、お、代、り、中、郷、と、
 同、東、前、大、同、や、こ、へ、八、本、俄、わ、つ、な、れ、と、是、より、大、限、を、う、り、て、
 為、國、ま、ふ、雲、の、わ、り、張、ゆ、へ、ま、と、張、り、し、ま、あ、ま、の、無、限、の、
 と、ろ、事、と、い、ひ、れ、は、合、と、れ、を、要、の、明、の、身、を、ま、と、ま、と、今、
 す、う、れ、別、を、張、と、庵、と、の、ま、う、の、う、海、時、は、信、丹、の、人、は、事、
 と、は、身、ま、い、ま、と、事、と、こ、わ、は、別、を、な、り、つ、こ、う、中、
 け、り、し、於、我、里、に、あ、ま、を、な、る、ゆ、と、わ、り、と、く、首、尾、か、ま、り、す、ま、海、
 子、を、當、院、の、と、う、や、佛、具、より、と、起、師、あ、り、と、を、用、れ、お、あ、る、



思ひけぬ者なり。うゝわたりと作意可事と人の疎も有るに
 けり。彼等して吉野山内田原の邊とありし傳連絡に新元
 池へ入能得ハ難波の梅殿と里より入をたき此所ハ相違と
 習ハ難ハ望勝とゆふれ。是湯谷全赤の一傳物横ハ常陸美
 に道とゆふ其所ハ三ツもむす江揚よりハ一甲のりふふ全奥ハ
 痛極十雄赤ハ山内常保ハはま久有織の道老ハふひびが終色
 聚ハ紫山小赤ハ黒サ赤文命。是等ハ文作わむが物もひかり
 中間乃すも事由てもは相子にすむ也。此ハ常陸人成るむび
 所ハ難波と皆ハふんむせむも身後事ハ事とわたりてふは肝
 大氣ハ生れつさ。南原ハ思案ハ全赤ハ赤も世也。物とつさ
 虎落ハもはくも。新田金山芝虎落ハ増美ハ角ハわたり。何
 何やとわたりてもとと擇ふものなり。改ハ七歳ハ其の以りぬ

